

くらし

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

「明日の調査は隊を二つに分ける。バイシンツァフウェストに行くのは〇〇と〇〇と〇〇、それに私。出発は8時半。ホーライツァフに行くのは…」

キャンプで夕食の後、明日の予定を発表した。バイシンツァフウェストの担当になったB氏がニンマリした。

理由は「化石がたくさん出るから」？ いやいや、「久しぶりに家族に電話できる」からである。

現在はゴビ砂漠のど真ん中からウランバートルはおろか世界中に携帯電話で通話できる。ただ、アンテナが設置されている地方主要都市の近辺と、そのアンテナに電波が届く場所からしか通話できない。今回ベースキャンプを据えたバイシンツァフは少し土地の低い所にあり、50〜100m離れた所にあるアンテナには電波が届かなかった。ところが、昨年新たに見つけた化石産地バイシンツァフウェストは少し標高が高く、丘の上に登ると電波が届いたのである。

翌日、バイシンツァフウェストに着くと、モンゴルの隊員たちは小高い丘に登り、そこからウランバートルの家族に次

④ ゴビ砂漠でスマホ？

石垣 忍

々と電話をしていた。電話をする隊員の姿を見て二十数年前の通信事情を思い出した。日蒙共同調査が始まったころ、日本と現地との連絡をどうするかは大きな課題だった。緊急対策として必要だという結論になり、スーツケース大の格納器に入った衛星電話を携行した。

通信事情大きく変化

確かに緊急通話には役立った。これは大いにありがたかった。一方、連絡手段があるなら…ということで、毎日日本に連絡をしなくてはならなくなった。こちらの報告はもちろんだが、日本からも「明日までにこれこれのことを考えて連絡してくれ」などという注文も来た。メールが発達すると、毎日テントの中でコンピ



ゴビ砂漠の小高い丘から携帯電話をかける隊員たち（ゴビ砂漠南東部バイシンツァフウェスト）

ューターを使ってメールを打つことになった。夜の過ごし方が変わった。砂漠までオフィスがやってきたのである。当時と比べると、現在の携帯電話事情は、そこそこ都合がよい。緊急時は車で片道1時間も行けば高い所に出られるので、そこから首都や日本に連絡をつければよい。その一方、キャンプするようなへき地では普通は電波が届かないから、いくら首都や日本から用事があっても呼び出されず、「電話もメールも来ない静かな国」にいられる。

ちなみに、最近は移動式住居に暮らす遊牧民たちもソーラーパネルで携帯電話を充電し、気軽に通話する時代になった。間もなくアンテナ網が整備されて、「通信事情が悪くて」という言い訳は通用しなくなるだろう。まさに電話はどこまでも追いかけてくる。（岡山理科大教授）

■ 随時掲載